



学園だより No.45

■発行人・発行所／学校法人 北海道カトリック学園 理事長 勝谷 太治
札幌市中央区北1条東6丁目10カトリック札幌司教館内

毎年、フィリピン、ミンダナオ島の中心部にある児童養護施設イースタービレッジを訪問しています。今この原稿もこの施設で書いています。ここの子供たちの笑顔と人懐っこさに触れると心が癒され洗われる思いをします。この施設は北海道の教会の支援で運営されており、一八才以下の子どもたちや奨学金生がおよそ30名で共同生活をしています。小さな子供たちは家庭を知らないので家族のような家庭的な雰囲気大切にしています。彼らは極貧の生活を強いられる中保護され、ほとんどが結核や栄養失調を患っていました。当然、ここに来るまで学校になど通っていない子供がほとんどです。彼らは年がいついても小学1年生のクラスからスタートします。そして、学校になじめず学校を卒業できない子も結構います。私がここにいる時は楽しく幸せそうな姿しか見ません。しかし、施設を卒業する時に彼らは厳しい現実に向面するのです。

時々、すでに卒業したはずの青年が施設で下働きをしていることがあります。その理由は外に出て生活に行き詰まり助けを求めて帰って来ているのです。次の仕事を見つけるまでここに帰って一時的に働いているのです。このように学校を卒業して働き



ミンダナオにて

学校法人 北海道カトリック学園
理事長 勝谷 太治

に出る子、中には学校を終了することをあきらめて仕事を見つけて去っていく子もいるのですが、単純な労働に嫌気がさしたり、不正な扱いを受け搾取されたりして行き詰まり、仕事を転々とする子がほとんどです。彼らは貧困の中、その人生の初めから圧倒的な不利な状況に置かれ、いくら努力してもこの貧困から抜け出せないという貧困のスパイラルにはまっています。

彼らのように、貧困ゆえに学校に行けずに働き、字を読めない人が世界中に大勢います。また環境破壊による災害やその他の原因により避難民となっている子供たち、そして何よりも、人間の愚かさが原因でもたらされる戦争や紛争の犠牲になっている子供たちが数多くいます。今日の前で底抜けに明るい笑顔を見せている子供達を見ながら、その未来が明るいものになるよう心から願います。



これから

認定こども園
長沼カトリック聖心幼稚園
保護者 小笠原 直実

年少クラスに四歳の息子、一歳児クラスに二歳の娘を通わせてもらっています。元気に通う息子ですが、昨年の初めての登園で大泣きしながら私を必死に追いかけようとする姿に、慣れるまでどれ位かかるだろうと心配しました。最近、息子が自



分から『初めて幼稚園に行った日、お母さんいなくならないでーって、いっぱい泣いたんだ』と当時の気持ちを教えてくれました。そんな息子が当時、恥ずかしがりながら満面の笑みで披露してくれたのは『やきいも、やきいも、おなかがグ〜♪』のじゃんけん手遊び歌です。園の学びを持ち帰ってきてくれて家族で何度も歌ってじゃんけんをしたことは、幸せな思い出です。

二歳の娘はある日、絵本を読んだあと片言で『せんせいどうもありがとうございました』と言ってくれました。まだ上手



遊んで育つ学びの芽、
そして非認知能力

札幌国際大学名誉教授 平野 良明

幼児期にこそ育つ非認知能力の基本

現教育要領への改訂前、OECDから発せられた「幼児期における非認知能力育成の重要性」について、我が国においてもこれを受け止め、各地の幼児教育施設はこれまで以上に質の高い幼児教育・保育の実現を目指して研鑽を重ね、子ども達のために日々実践している。

敬愛する養老孟司氏のこと

氏は1937年に鎌倉市に生まれ、幼少期は虫捕りに明け暮れて育ち医学の道に進む傍ら、長く保育園理事長も務めながら現代の子どもの育ちを案じ、想いや願いを社会に発信し続けている人である。社会の変化が子どもから自然を奪い続けてきたことを繰り返し語りながらデジタル世代を生き延びてくることができたことについて語っている。近著『子どもが心配』対談集（PHP新書）は、



人の子どもの未来について私に多くの気づきを与えてくれた。人として大事な三つの力

四人の識者との対談の中で語られたキーワードは「共感する力」「認知能力」「自分の頭で考える力」であり、それぞれの対談の底流に流れていたのが「子どもは自然」「自然はひとりでに展開していく」といういわば「子ども理解における本質論」であった。

私はギリシャの哲学者プラ

トンの「子どもは遊んで育つ」という言葉を思い起こしながら所与の環境の中で楽しく夢になつて過ごす子ども達の「自ら育つ力」「自ら互いに育ち合う力」への想いを新たにしたい。

「遊びは学び、学びは遊び、やってみてが学びの芽」

質の高い幼児教育はそれぞれの園環境を踏まえて「遊びを通して総合的に」行われることを目指している。自然に目を輝かし夢中になっている子、友達と時に喧嘩しながら楽しく遊ぶ子、どの子も「非認知能力」を耕しながら「卒園までに育てたい10の姿」に向かって育ち、小学校以降の総ての教科の芽を育んでいる。

おわりに

世界中に何億人の方がいようと、自分自身はこの広い世界にたった一人しかない。そのたった一人の自分だけが実現できる、文字通り「かけがえのない人生」を生きたるために、子どもたちは神様から命を与えられている。そのことを守り、伝え続けていくのが教育の使命ではないでしょうか（『子どもが心配』最後の対談高橋和也氏の言葉より）。



北海道カトリック学園
幼児教育研究会を終えて

9月6日に開催されました幼児研究会に学園の教職員75名が来園くださいました。この日のテーマを『未来につながる豊かな保育』とし、午前中は公開保育、午後からは教職員向けの研修会を行いました。

公開保育では、子ども達の持っている力が十分に発揮されるよう、事前にクラスの中でどのような活動を行いたいか、何を見てもらいたいかを考えました。得意な折り紙製作をプレゼントしたい！調べたことを発表したい！私たちが好きなものを伝えたい！と、子ども達が主体的に意見を出しながら準備を進めてきたことで、当日は自信に溢れ、嬉々とした表情で活動に参加することができました。

午後からの研修では、教育実習生とのより良い関わり方と、けん玉遊びの2つを学びました。『楽しいけん玉遊び』では、岩見沢在住



のけん玉の先生をお招きして、教職員全員が様々な技にチャレンジし楽しい時間を過ごすことができました。

また、閉会式で歌った聖歌『アーメンハレルヤ』では、歌詞にもある通り、それぞれ違う場所においても同じ思いを持って働く仲間がいることを再確認できた時間となりました。



これから次の世代を生きたる若い子ども達の成長のために祈り、力を尽くしていきたいと思ひます。

研究会を開催させていただきましたが、今回学んだことを今後の保育に活かせるよう努めていきたいと思ひます。

認定こども園岩見沢天使幼稚園
園長 高橋 恵美

笑顔いっぱい さんぽみち

真駒内聖母認定こども園

自然が生み出す笑顔

保育教諭 廣井 ひかり

当園は、自然に恵まれた環境の中にあります。園の周りには木々がそびえ、季節ごとに花が咲き、いつも自然の息づかいを感じられます。

子どもたちは花びらや木の実を集めたり、虫を探したりと毎日が小さな発見の連続です。園の周りも自然豊かで、散歩に行くと子どもたちは袋いっぱいのお土産を持って帰って来ます。秋には赤や黄色に色づいた葉っぱ、どんぐりや松ぼっくりなど、自然の宝物を見つけて「きれいだからマリア様にあげるんだ」と玄関のマリア像にお捧げしている子どもたちもいます。

この環境を生かして、春には落ちた花びらを集めてすりつぶし、色水遊びをしたり、秋には石鹸をつかった泡のパフェづくりをし、トッピングにはどんぐりやとちの実などを乗せたり、冬には松ぼっくりのツリーをつくったりと季節に合わせた遊びを取り入れています。子どもたちの大好きなコーナー遊びの一つとなっています。

色とりどりの花や葉、日の光、そして子どもたちの笑い声が溢れたこの環境の中で、子どもたちは自然とともにのびのびと成長しています。これからも、自然の恵みを感じながら、子どもたち一人ひとりの「やってみたい!」を大切にしていきます。

小規模保育事業所 広島てんしのおうち

日々をつなぐ保育連絡帳

保育教諭 近藤 容子

当園の0歳児と1歳児の子どもたちは、毎日保育連絡帳を持って登園します。連絡帳は、日々の生活リズムやご家庭でのエピソードを記入していただき、園からはその日の出来事などを記入してお返りする交換日記のようなものです。お忙しい中ですが、保護者の皆様にはコメントを書いています。その内容は、体調やお家で遊んでいた時の様子、食事があまり進まず大変だったという悩みや、「～ができました」という成長した姿など様々です。読んでいと微笑ましくて、その時の様子が目に浮かびます。保護者の方からの言葉には、愛情がたくさん詰まっています。

その言葉の数々に、共に成長を見守ることのできる喜びと「今日も頑張ろう」という励みをいただいている毎日です。保育連絡帳は、子どもの様子を共有してご家庭と園をつなぐ大切なツールです。

これからも保護者の皆様と共に、喜びや悩みを分かち合いながら、子どもたちの成長を楽しみに日々の保育に努めたいと思います。

認定こども園広島天使幼稚園

「エスコンフィールドで映画撮影」

保育教諭 山田 梨緒

広島天使幼稚園では、「天使フェスティバル」というお店屋さんごっこがあります。今年には映画館・おもちゃ屋さん・スーパー・ホテルがありました。私が担当した映画館では子ども達が様々な役になりきって2つの映画作りを楽しみました。1つ目の「おおきなじゃがいも」ではポケモンや野球選手など、自分のなりたいキャラクターを選び、衣装を自分で作り、撮影を進めました。2つ目の「野球中継」では、北広島にエスコンフィールドがあることから、実際に野外ロケを行い、本格的な映画撮影を体験しました。外にある小さな球場でバットを持って実際にボールを打ってみたい、女の子達はファイターズガールになりきって「きつねダンス」を踊りました。撮影に至るまで「僕は万波選手役だからセンター守るね!」や「撮影の合間に筋トレしとく!」と積極的に意見を出し、みんなで作品を作り上げていきました。当日はポップコーンやジュースを販売しながら上映会を開き、「ようこそ!キラキラ映画館へ!」と元気な声が響く中、大盛況の映画館になりました。これからも子ども達が主体となってアイディアを出し合いながら、みんなで作りあげるお店屋さんごっこを大切にしていきたいです。

旭川藤幼稚園

卒園児の未来を祈る

教務主任 岩間 有希

今、目の前にいる子どもたちがどんな大人に成長していくのだろうか?と想像することがあります。幼稚園の先生という職業は、人格形成の基礎を作る大切な幼児期に関わりますが、卒園児たちのそのほとんどの行く末を辿ることはできません。可愛い卒園児たちがこの先、不安や悲しみでいっぱいになることや生きる希望を見失ってしまうこともあるかもしれません。そんな時、私たちがそばにいることは叶いませんが、神さまが見守ってくださる温かさ、優しさを思い起こし、自分や人を愛する心があれば一人ひとりがかけがえのない存在であると再び感じられるのではないのでしょうか。

朝のお祈りから始まる藤幼稚園の一日。子どもたちは、胸の前で小さな手を合わせます。誕生会では神父様から神さまのお話を聞き、七五三のお祝いで礼拝をし、クリスマスおゆうぎ会でイエスさまの生誕劇を行うなど、日々の生活の中で神さまの働きを恵みとして体感しています。

宗教教育とは、心を育てることだと考えます。自分で人生の選択ができるようになった時、誤った道を進まないよう、心を育てる藤幼稚園での経験が子どもたちの道を照らす光となってくれることを願っています。